
NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.12

国立
国会
図書館
月報



資料の世界の歩き方 写真を読む 第2回

名士の顔をめぐって—印刷前夜の肖像写真—

出島のクリスマス

国立

国会

図書館

月報

NO. 704
DECEMBER
2019
CONTENTS

1 『奈留美加多』

—いにしへの古のデザインに学ぶ—

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

6 資料の世界の歩き方 写真を読む

第2回 名士の顔をめぐって

—印刷前夜の肖像写真—

17 出島のクリスマス

16 館内スコープ

調査及び立法考査局職員のための夏期集中講義！

22 本屋にない本

『五線譜に描いた夢』

23 NDL Topics

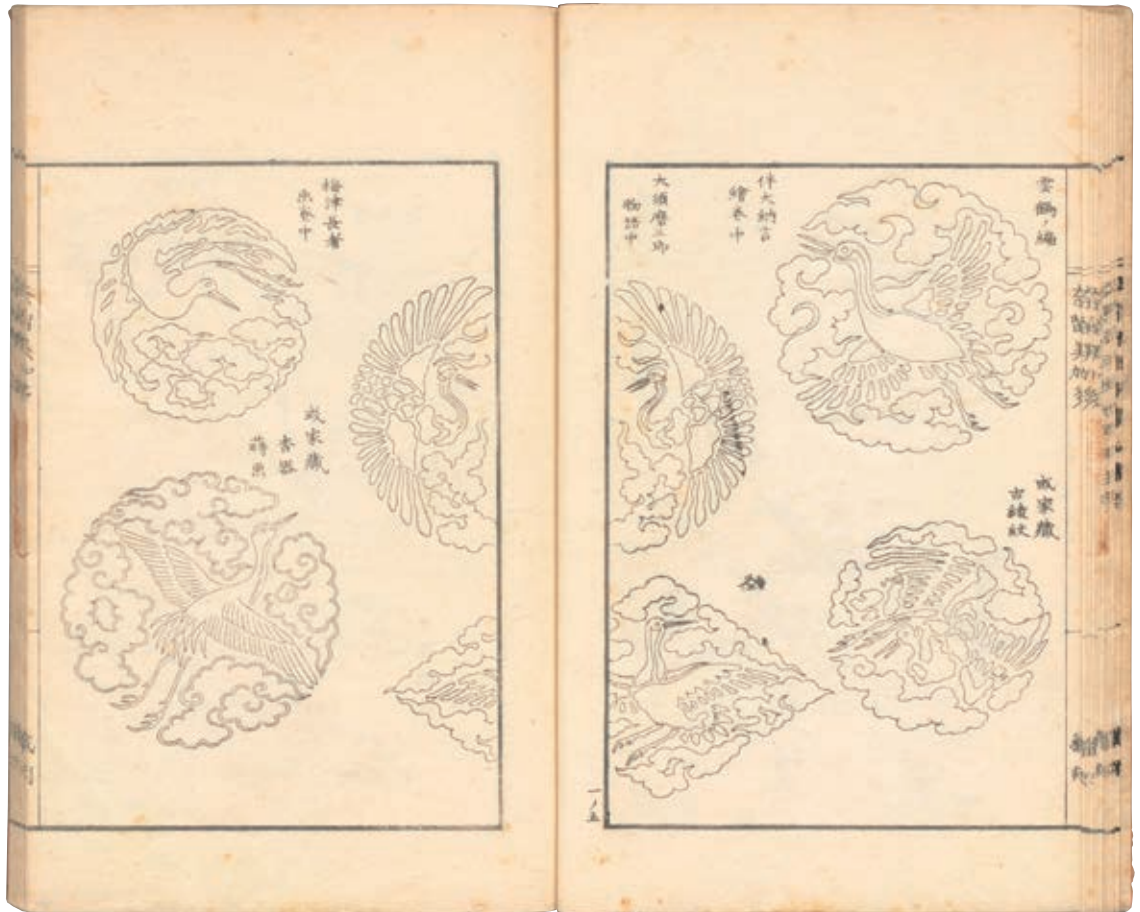
25 年間索引



表紙：
「青森市新町通夜景」
『青森県画譜 第1-12輯』
今純三 著 東奥日報社
昭和8-9 27×39cm
<請求記号 430-44>

『奈留美加多』^{いにしえ} 一古のデザインに学ぶ

藤田千紘



1巻より。鶴は言うまでもなく吉祥文様の代表格である。本図では、瑞雲（めでたいことの前兆として現れる雲）と鶴を組み合わせた雲鶴文を集めている。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899476/14>

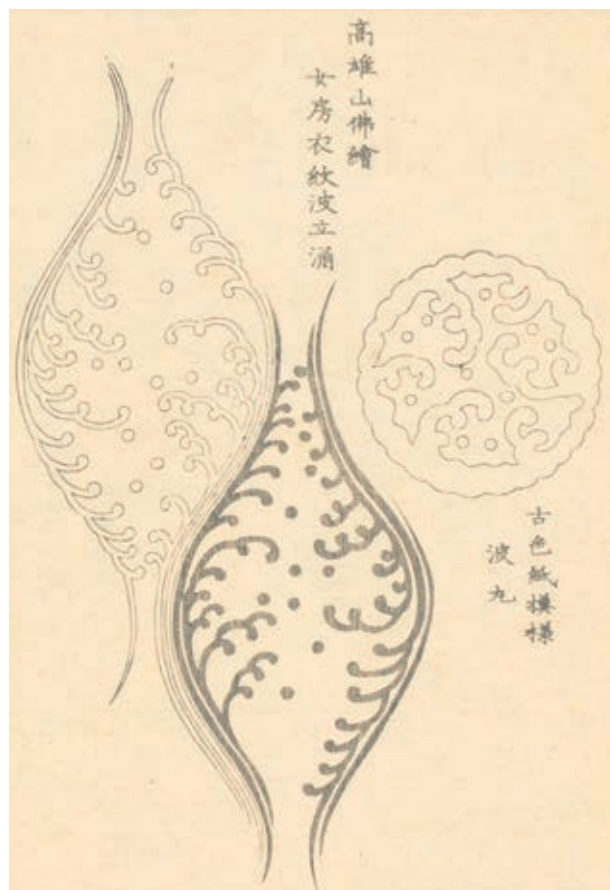
奈留美加多

小田切春江 著述 吉川半七、林平次郎（発売）
1903.12 5冊；25cm <請求記号 W166-H5 >

身の回りの器物や衣服、建築に至るまで、人は古くからさまざまなものに模様（文様）を施してきた。花鳥・人物・自然現象・架空の生き物の姿を抽象化したかたち、幾何学的なパターンから成るかたちなど、模様のかたちは実に多種多様でバリエーションに富んでいる。それらは目を楽しませてくれるだけでなく、それぞれに意味や願いが込められたものでもある。

今回ご紹介する『奈留美加多』は、日本の古い模様を集めた図案集（模様集）である。著者の小田切春江（1810・1888）は尾張藩の藩士で、森高雅（玉徳）に絵画を学び、『尾張名所図会』の挿絵を手掛けたことなどで知られる。家督を子に譲った後、明治13（1880）年に名古屋博物館付属員となり、工芸・意匠方面の指導的立場に立った。翌年には奈良東大寺の宝物を実見し、そのうち文様の珍しいものを選んで模写し持ち帰る機会を得た。

本書の緒言によれば、春江はその経験をきっかけに古の風習に心惹かれ、古い調度品の蒔絵や染織品などで目に触れたものを写したり、先人の写し伝えたものを模写したりして、数多くの古模様を収集するに至った。それらの活用を意図して、出所が明らかなものを縮写してまとめたところ、



1巻より。波打つ曲線から成る文様は「立涌(たてわく、たちわき)」と呼ばれ、水蒸気が立ち昇るさまを表すともいわれる。さまざまな文様(本図では波)と組み合わせられるが、特に雲を配した雲立涌は有職文様(公家階級の装束などに用いられた伝統的文様)のひとつである。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899476/24>

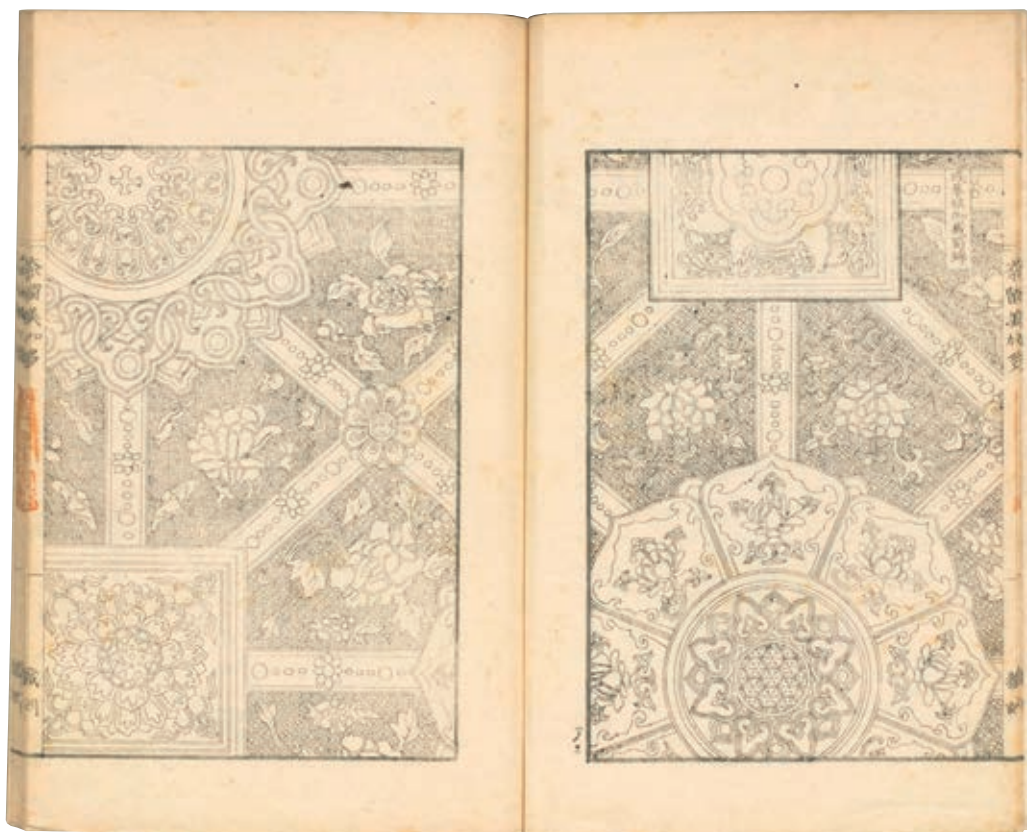
2巻より。植物をモチーフにした文様の数々。上は、中国から伝わった唐花文を菱形に擬して意匠とした「唐花菱」である。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899478/14>

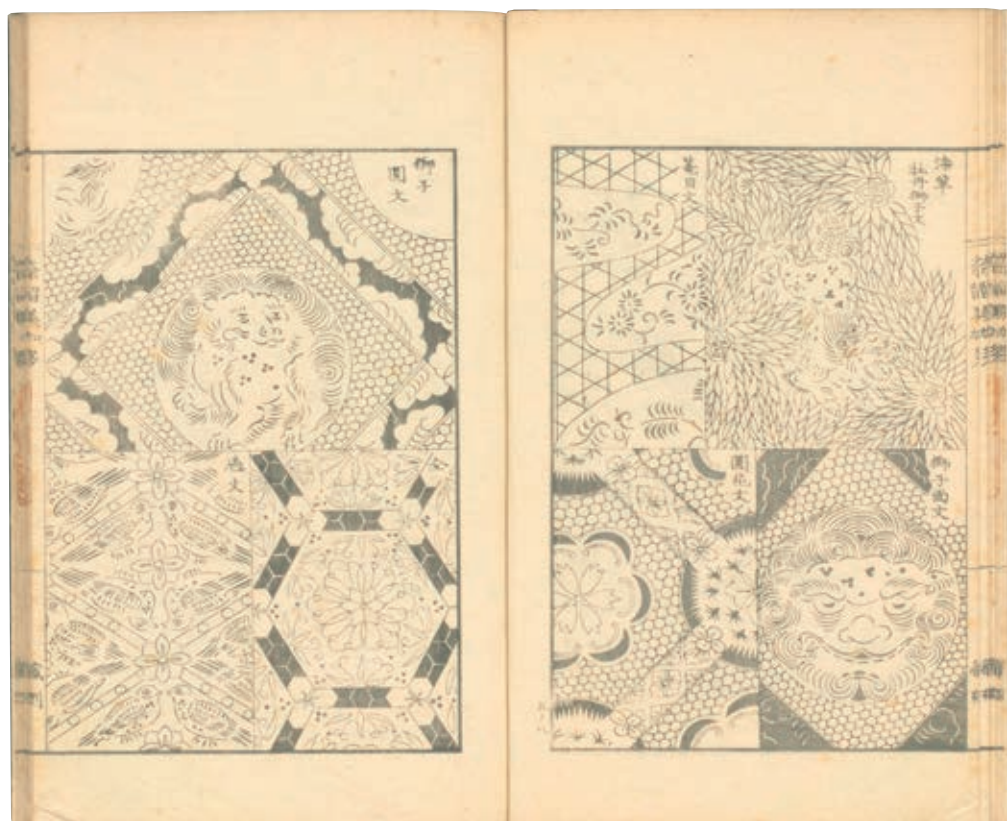
版元の片野東四郎から刊行を打診されてこれに応じたという。初版〔全五巻が刊行された明治16(1883)年当時、春江はすでに73歳。老齢ながら、短期間で大量の模様を写し集めたエネルギッシュな仕事ぶりがかがえる。緒言では、明治15(1882)年に東京で開催された第一回内国絵画共進会に出展された古画などの模様を、子の春陵しゅんりやうに写してきてもらったことも述べられている。

タイトルの「なるみかた」には巻によって異なる漢字が当てられており、四巻では「鳴海賀太」となっている。「鳴海」は尾張国に位置した東海道の宿場で、鳴海絞りと呼ばれる絞り染めが盛んであった。さまざまな模様(「かた」が見られる鳴海絞りに関連づけて、さまざまな模様を集めたものという意味合いで名付けられた、との説もあるようだ。

明治期にはジャポニスムの影響もあって染織品や工芸品の海外輸出が盛んになったことから、それらのデザインの質を高めることが急務とされ、政府による图案指導の一環として图案集が配布された他、民間でも多くの图案集が刊行された。この時期には古模様の集成が盛んであったが、それらの中で、『奈留美加多』の特徴は以下の点にある。



2巻より。「或華族御蔵蜀錦」との添え書きがある。中国の蜀は赤染にすぐれ、そこで産出する錦は蜀江錦と呼ばれた。やがて蜀江錦の代表的な文様を「蜀江文」と呼ぶようになり、京都の西陣でもこれを模した織物が生産されるようになった。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899478/5>



5巻より。どことなくユーモラスな表情をした獅子の文様。獅子文は古代ペルシアから中国に伝わり、唐代の中国から日本へと伝わった。実物を見る機会がなかった日本では、想像上の動物という側面が強かった。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899492/10>



本書及び続編の出版広告には「陶磁器漆器染織鍍金彫刻刺繍等に應用せよ／苟くも工芸美術の製作に従事する者は必ず座右に備へて日々参考に供すべき良書なり」との謳い文句が見える。

「[広告] 書籍 小田切春江、春凌(ママ) 著「奈留美加多」／東京京橋 吉川弘文館『読売新聞』1907.10.17<請求記号 Z81-16>

・内容

法隆寺や正倉院の宝物にはじまり、各所の染織品・工芸品・建築物の装飾など、広範囲から模様を抜き出している。さらに、古い習俗を描いている絵巻物(伴大納言絵巻、年中行事絵巻など)からも模様を写している。全五巻というボリュームもあり、古模様の一種集大成的な書物であったともいえる。巻末の「附言」では、模様の出典についても簡単に解説している。

・図版

木版で刷られた図版は細密な線で描かれており、彩色は施されていない。このため、模様の細部まではつきりと見て取れるようになってきている。また、各図にはその出典が

付記されている。

初版刊行翌年の第二回内国絵画共進会で、『奈留美加多』を著したことによって春江に著述褒状が与えられた。本書は好評を博したらしく、後に子の春凌によって続編全三巻も出されている。本書及び続編の出版広告(左上図版)の謳い文句からは、幅広い分野への参考となることを出版元が売りにしていたと分かる。

集められた模様の数々はバラエティに富み、実用目的を離れても魅力的で、いま眺めても飽きない。近年では本書の内容を大人向けの塗り絵(！)として刊行した例もあるようだ。長い歳月を経てきた模様の豊かな世界をぜひ楽しんでいただきたい。

- 1 小田切春江 編『なるみかた 1-5』片野東四郎 明 16.7
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854534>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854535>
 (モノクロ画像)
- 2 小田切春凌 著、前田香雪 増補『なるみかた 続編上-下』吉川弘文館 明40.1
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854536>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854537>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854538>
 (モノクロ画像)

○参考文献

- 「憲政資料室の新規公開資料から」『国立国会図書館月報』655、2015.11
- 『古社寺の装飾文様 Ornamental Patterns of Great Temples and Shrines 素描でたどる、天平からの文化遺産上』青幻舎 2014.4<請求記号 KC521-L126>
- 岩切信一郎「メディアとしての近代版画史(第6回) 明治工芸界の必需品--図案・模様集」『版画芸術』39(4)(通号 151) 2011.春<請求記号 Z11-620>
- 森仁史「明治期における民間図案集の始まり」森仁史 監修『叢書・近代日本のデザイン 4』ゆまに書房 2007.11<請求記号 KC521-J9>
- 並木誠士 監修『すぐわかる日本の伝統文様 名品で楽しむ文様の文化』東京美術 2006.3<請求記号 KC521-H226>
- 長崎巖 監修、弓岡勝美 編『明治・大正・昭和に見るきもの文様図鑑』平凡社 2005.6<請求記号 KB441-H45>
- 国立国会図書館 著『人と蔵書と蔵書印 国立国会図書館蔵本から』雄松堂出版 2002.10<請求記号 UM57-H2>
- 科学技術政策史研究会 編『日本の科学技術政策史』未踏科学技術協会 1990.12<請求記号 M42-E89>
- 日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会 編『原色浮世絵大百科事典 第2巻(浮世絵師)』大修館書店 1982.8<請求記号 YP14-684>
- 『愛知縣勸業雑誌 第7號 明治17年12月發兌不發賣』愛知縣 1882-1884
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1080885> (モノクロ画像)

『奈留美加多』はどこから？



2巻冒頭に捺された印は、左上から時計回りに、特許標準局の印3つ（受入印、分類記号記入欄と思しき印、蔵書印）、渡辺千秋の蔵書印2つ（印文は「渡辺千秋蔵書」及び「楓閣図書」。「楓閣」は渡辺千秋の号）。



1巻表紙。



参考：渡辺千秋の自著『夜雨百篇稿本』表紙。こちらはラベルがよく見える。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540259>

当館所蔵の『奈留美加多』は、興味深い来歴を持っている。2巻の最初のページをご覧いただきたい(左上図版)。このページに捺された複数の蔵書印から、本書は明治・大正期の官僚・政治家である渡辺千秋の旧蔵書であり、特許標準局の蔵書であった時期を経て、当館に所蔵されたことが分かる。

渡辺千秋は長野出身で、各地の知事や内務次官などの要職を歴任した後、明治43（1910）年から大正3（1914）年にかけては宮内大臣を務めた*。多忙な公務の傍ら熱心な読書家であったといい、自身の蔵書に蔵書印を捺した他、部類・函号・書名・冊数を記した独自のラベルを表紙に付している。『奈留美加多』のそれは残念ながら当館のラベルで一部隠れているが、部類「考古」、冊数「五」などの記載が読み取れる(右上図版)。

特許標準局は、昭和20（1945）年、内閣技術院解体にともない、技術院の所管していた標準化行政を担うために商工省の外局として設置された機関である。昭和23年8月に特許局（現在の特許庁）へと改組された。本書が特許標準局へ移った経緯は判明しなかったが、受入印には「昭和22年7月9日」とある。その後、当館へは個人の寄贈により所蔵され、2004年に受入がなされている。

人気を博した図案集が、要職を務めた政治家の書架に収まり、特許を扱う官公庁で参考とされ、現在ではデジタル化されて誰でもインターネット上で見るできるようになった。

*本書以外に、当館は昭和22年から翌23年にかけて、渡辺の旧蔵書60点を購入した。また、憲政資料として、個人から寄贈を受けた「渡辺千秋関係文書」972点を所蔵・公開している。

資料の世界の歩き方

写真を読む

あしな 名 ふみ

第2回

名士の顔をめぐって —印刷前夜の肖像写真—



3 新渡戸稲造
<品川弥二郎関係文書(その1)
1758 >



2 アメリカジョージタウンズ大学
留学中。裏書には「呈 品川弥一学兄
千八百八十七年九月十一日 太田稲造」
とある。品川弥一(品川弥二郎長男)は
ドイツ留学中。名刺判
<品川弥二郎関係文書(その1)
1758 >



1 桂太郎 ドイツにて 名刺判
<榎本武揚関係文書 17-13 >



珍しい顔とは何か

図書館員にとって、歴史的人物の肖像写真の有無は、時折受ける問い合わせの一つかもしれません。

あるとき、桂太郎の伝記を書くこととしている利用者に、珍しい顔写真があるか問われ、この方にとってはどのような顔が珍しいのだろうかと思案しました。画像1を示した際に、利用者が喜ばれた表情を忘れることができません。

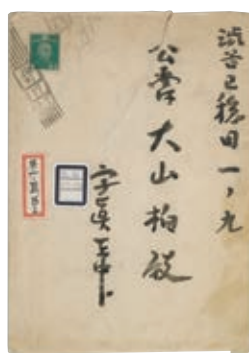
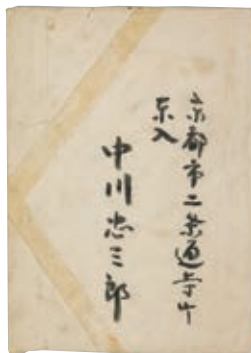
ことに画像をめぐると史料の珍しさは、その稀少性だけではなく、印刷や、転載など広義のメディアを通じて形作られる心証と関係があるようです。

上の一葉(画像2)は、品川弥二郎のアルバムにあるものですが、眼光に見覚えがないでしょうか。裏書にあった「太田稲造」を調べ、新渡戸稲造と知って納得がきました。

新渡戸稲造の五千円札「一九八四〜二〇〇七年の五千円札」のもととなった写真は新渡戸記念館所蔵の大正六(一九一七)年の写真です。新渡戸の五千円札を見たことがあるか否かで、画像2の3の写真に抱く印象も異なりそうです。



4『近世名士写真』近世名士写真頒布会,1935 其一



6 上：十人にて撮影・下：中川忠三郎封筒
後列右から3目目に大山巖が写ることから、中川から大山柏（次男）に贈られたものか。
<大山巖関係文書（寄託）57-3 >



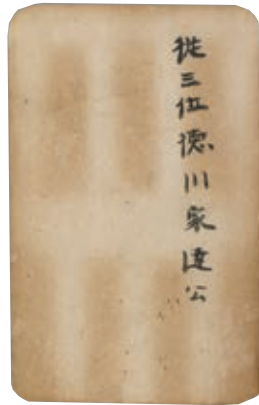
5 大山巖 ジュネーブにて 名刺判
<榎本武揚関係文書 17-21 >

転載の妙

近代日本の形成に影響のあった、政治家・官僚・軍人・実業家・学者・芸術家等の肖像を履歴とともに提供している当館のサイト「近代日本人の肖像」(電子展示会)も肖像写真の転載の循環に一役買っているようです。

顧みれば、「近代日本人の肖像」の公開は平成一六(二〇〇四)年七月に遡ります。このサイトは、累次の追加を経て現在は約六〇〇名の肖像写真を載せ、広く転載されていますが、このサイトはそもそも『近世名士写真』其一・其二(近世名士写真頒布会、一九三五)(画像4)という写真帖等に所収された肖像写真を掲載するところから始まっています。⁽¹⁾

『近世名士写真』は、往時、京都の医療器械商で古写真のコレクターであった中川忠三郎の秘蔵写真をもとに出版されました。⁽²⁾ 同書は当館の源流の一つである帝国図書館の蔵書を経て当館の所蔵に帰した写真帖に過ぎません。当館が同書所収の肖像についてその人物を象徴する姿であるとして「お墨付き」を与えたわけでもありませんが、当館の「近代日本人の肖像」というサイトを通じて、インターネット上に提供されたことで、一人のコレク



8 徳川家達 名刺判
徳川宗家第十六代当主
＜赤松則良関係文書 109＞



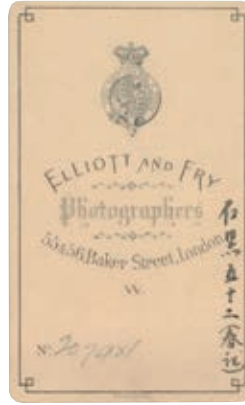
7 徳川家達 名刺判
裏書には15歳とあるが、その年代より若いものに見受けられる。
＜榎本武揚関係文書 17-28＞



9 石黒五十二 名刺判

左の写真館は、長崎の上野彦馬、右はロンドンの Elliott and Fry。石黒は土木技術を学びにイギリスに留学。

＜榎本武揚関係文書 17-8＞



鮮やかに読み取れることです。
画像7と画像8はどちらも幕臣の家に伝存した名刺判写真ですが、印画や台紙からみて、おそらくは画像7のほうが、オリジナルに近い版と思われれます。旧幕

躍的な拡大をもたらしました。
当館憲政資料室の様々なコレクションの中に散在する名刺判写真は、少なくとも八〇〇枚を数えます。旧蔵者が明らかにコレクション資料の醍醐味は、そうしたやりとりから当時の人脈のありようが

真一枚あたりの値段が下がったことは、肖像写真を撮る人と見る人双方の飛躍的な拡大をもたらしました。
真一枚あたりの値段が下がったことは、肖像写真を撮る人と見る人双方の飛躍的な拡大をもたらしました。

真の授受が世界的に流行しました。^③ デイステリ (André-Adolphe-Eugène Disdéri 一八一九—一八八九) による名刺判写真(カルト・ド・ヴィジット)の発明(二八五四)により、写真が小型化し、写真一枚あたりの値段が下がったことは、肖像写真を撮る人と見る人双方の飛躍的な拡大をもたらしました。

タリーの収集写真に、新しい転載の循環が付け加わり、中川の収集写真は思わぬ形で後世に広まったといえそうです。
印刷前後の写真
写真印刷技術の普及以前においても、写真が手で渡されたり、手紙に同封されたりすることは、多々みられます。一八〇〇年代後半には、名刺サイズの写真の授受が世界的に流行しました。^③ デイステリ (André-Adolphe-Eugène Disdéri 一八一九—一八八九) による名刺判写真(カルト・ド・ヴィジット)の発明(二八五四)により、写真が小型化し、写真一枚あたりの値段が下がったことは、肖像写真を撮る人と見る人双方の飛躍的な拡大をもたらしました。



12 原田熊雄の家族アルバムより
原田熊雄（1888～1946）は西園寺公望の秘書
役として知られる。
<原田熊雄関係文書 84 >

10 左から、大鳥圭介、安藤太郎、田辺太一
キャビネ判
ロンドン Elliott & Fry で撮影されたもの。メ
イヨール、シルヴィなどと並ぶ、ロンドンの
有名な肖像写真館。
<榎本武揚関係文書 18-5 >



11 左から近衛篤磨と品川弥一 キャビネ判
「A. Konoye Y. Shinagawa 1886 年 2/9」
とある。写真館は Fritz Meycke。
<品川弥二郎関係文書（その1）1758 >



臣が徳川家の若き当主の写真を持ち続け
た事例として、胸に沁みるものがありま
す。

外国での撮影

各国の写真の歴史において、有名人、
貴顕と位置付けられる人物の肖像写真の
受容は、重要な意味を持ちます。

一八五〇年代のころから、ヨーロッ
パの大都市においても、肖像写真館が増
加しました。こうした外国の写真館でわ
が国の先人たちが撮影した写真は、往時
の写真館のセットとあいまって、いわ
ば箱庭のような独特の魅力に満ちていま
す。

一概に比較するわけにもいきません
が、昭和に入ってから家庭のカメラに
よる写真（一例として画像12）と比べると、
構図の制約からか、ときには撮られる側
の張りつめた感じが伝わってきます。

見られる天皇 見る天皇

翻ってわが国の肖像写真の受容の歴史
において特に重要なのは明治天皇の存在
です。明治天皇といえは、御真影や巡幸
に象徴される「天皇の姿」を見せる側面
が強調されてきました。



13 西周 キャビネ判
<西周関係文書 185 >

12 阪谷素(朗廬) キャビネ判
裏書には直筆で撮影の経緯が記される。
<阪谷朗廬関係文書 186-9 >



(上)「大元帥陛下の御眞影」『憲兵雑誌』3号
1908年1月 憲兵雑誌社<雑 32-16 >
(下) 明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」
(宮内庁 HP より)

明治天皇のための人物写真帖
わが国の肖像写真の歴史において特筆すべき出来事の撮影として、明治天皇の明治二二(一八七九)年の命による計四五三一名に及ぶ撮影事業があります。

第一に、天皇の手に集まる写真は、即ち天皇自身が目にした情景を意味する訳ではなく、巡幸に際して献上される写真や、侍従の視察した記録写真が献上されるものもあるなど、多様な人々が見たものを捉えた写真だということです。第二に、慰霊や顕彰といった様々な目的のために、明治天皇の手に多彩な写真が集まっていたことです。総攬する存在である天皇のもとに集まった人物事物の写真は夥しく、質量ともに一級の記録です。

近年、宮内庁の関係機関において、天皇の御手元写真と呼ばれてきた秘蔵写真の公開が相次ぎ、従前よりアクセスが容易になりつつあります。歴史資料の精査に基づきその来歴を明晰に解明する文献もあわせて登場していることも歓迎されます。⁽⁴⁾
こうした資料の公開は、明治天皇のまなざしや写真との関係について、新たな知見を具体的に示してくれています。



(絵・正保しょうほ五月)

14 龍野周一郎の旧蔵アルバムより
 <龍野周一郎関係文書 360-2 >



群臣の肖像写真を明治天皇の座右に備えるべく、宮内省の費用負担で主に印刷局で撮影された写真は、皇族、高級官僚、軍人、地方官、華族、神官、僧侶などを網羅しています(前ページ右下写真)。これほど多くの人物が、否応なく肖像写真の撮影を経験したことの意義は、はかり知れません。

献上写真と自用写真

この際、撮影された本人が、私用で印刷局から焼き増し写真を購入することも許されました^⑤。政治家、官僚等の旧蔵資料からなる当館憲政資料室で所蔵するコレクションにも、天覧用と同じ写真を印刷局に注文したとみられる写真が散見されます(画像12と13)。

このように購入された高官の肖像写真は多少出回り、複製されたり、販売されたりしたものがあつたとみられます。そのカラージュ写真が残るのは衆議院議員・龍野周一郎のアルバムです(画像14)。

集められ、大切に保管された肖像写真の数々



15 第二軍司令部々員写真帳

美しい蒔絵の表紙がつけられたアルバム。陸軍の第二軍は、日清戦争に際し、明治27(1894)年9月～明治28(1895)年5月に編成。司令官大山巖大将。参謀長井上光大佐。第二軍の将校等の肖像写真が順々に収められている。<大山巖関係文書(寄託)60-17>



16 成器社の写真 日高真實、澤柳政太郎、木内重四郎。名刺判

成器社は、演説を練習し学術を研究することを目的に、明治12(1879)年に東京大学(のち東京帝国大学)や第一高等中学校生徒の有志らで作られた親睦団体。そのメンバーであった阪谷芳郎(東京大学卒、のち大蔵官僚)の手元に残された写真。満29歳で早逝した教育学者・日高真實(高等師範学校教授兼帝国大学文化大学教授)の写真をはじめ、貴重な写真からなる。ほかに石塚英蔵ら。

<阪谷芳郎関係文書935>



17 維新元勳写真帖 名刺判
土方歳三や松岡馨吉の写真も見える。

<牧野伸顕関係文書542-67>

明治一二（一八七九）年の明治天皇の命による高級官僚の肖像写真撮影の「副産物」の一つに、開拓使の官員写真帖があります（現・北海道大学附属図書館所蔵⁶）。

彼らの肖像写真は、明治天皇が見るために撮影された写真と体裁が一致します。天皇が見るための官員の写真のセツトが、写真帖の形式で北海道に現存することは不思議です。

ある記録によると、きっかけは、函館支庁の履歴係、小貫庸徳（開拓六等属）の意見書「本使奏任官以上写真徴収ノ儀ニ付開申」（明治一三年三月五日付）にあります。

皇国三大節等御祝日ニハ庁中ニ聖上並ニ皇后宮ノ御照ヲ奉掲シ官員一同拜賀仕候例規ニ之アリ、願クハ長官公始メ本使奏任官以上ノ写真モ悉ク御備置右等ノ如キ御祝日ニハ必ス之ヲ御照ノ下ニ順次相掲ケ候様仕度、然ルトキハ判任以下末班ニ至ルマテ各員咫尺

相接スルノ思ヲ成サシメ仮令卒爾道路ニ遇ヒ其風貌ヲ熟知セル為メ或ハ之ヲ他人視スル等ノ失体モ無之ラシムヘク、且本支各庁一体協和ノ意ヲ表スル一端トモ相成事体ニ於テ格別ノ御差支モ之アルマシク、之ヲ補充スルトキハ長官公ノ写真丈ケハ管内各小学校へモ巻葉ツ、頒付致シヨキ度等トノ儀ト存候條此段開申仕候也

履歴係
明治十三年三月五日 開拓六等属 小貫庸徳
開拓少書記官 柳田友卿殿

開拓使において、御真影の遥拝は明治七（一八七四）年頃に始まっています。奏任官（高級官僚）の写真も順次揭示すれば「判任以下末班ニ至ルマテ各員咫尺相接スルノ思」、当時本支庁に分かれていた開拓使（札幌本庁、函館支庁、根室支庁、東京出張所）の一体協和につながる、偶然出会ったときに「他人視」する失礼もないと説く小貫の発想は、写真を見るという行為にその像主との心的なコミュニケーションを託すものです。あわせて開拓使長官（黒田清隆）の写真を小学校に頒布するこ

とも提案しています。

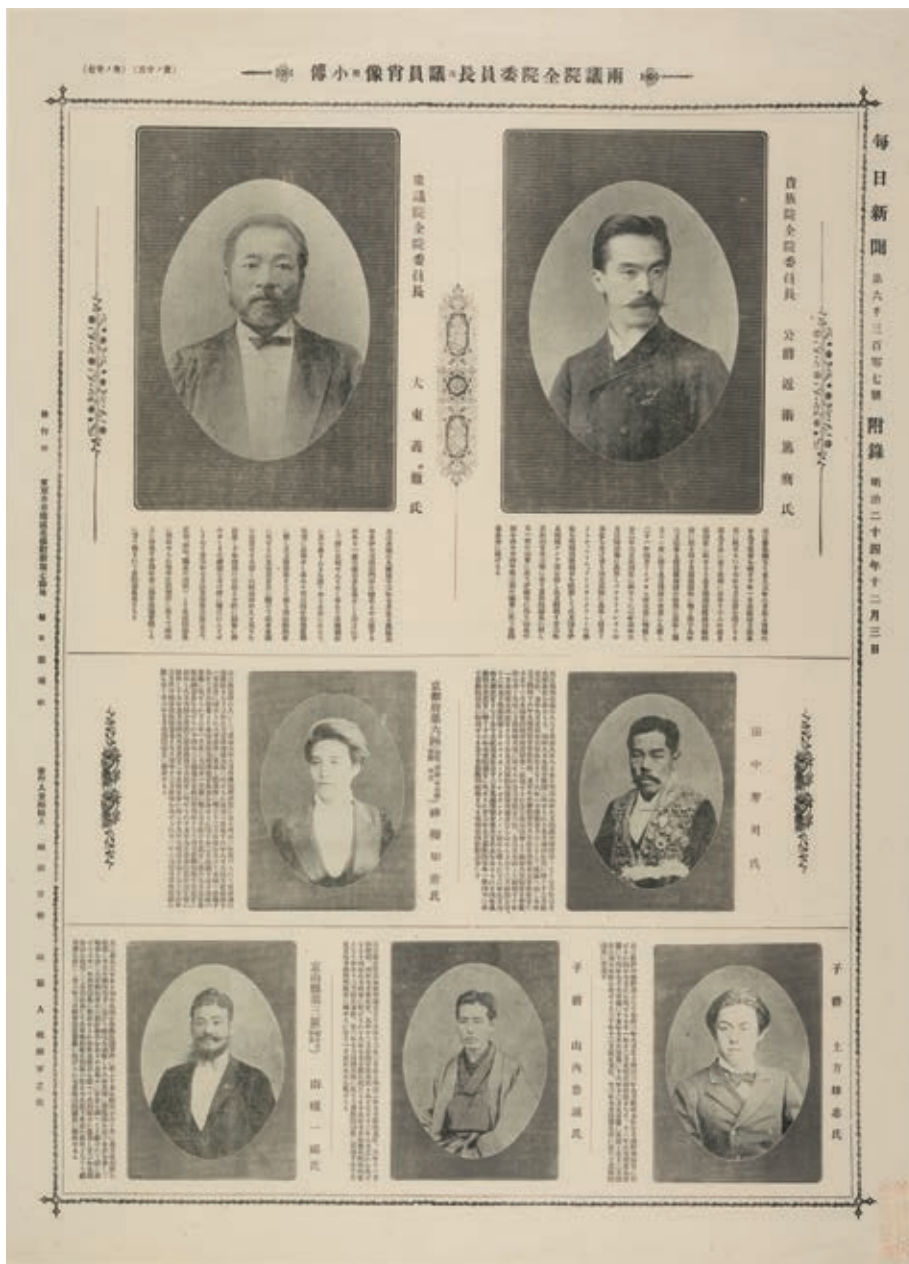
上司の写真を祝日に飾りたいだろうか。これらの提案をすれば、上役におもねったように周囲から誤解されないだろうか。そうした心配はさておき、御真影の扱いを、長官・奏任官以上の肖像写真にも準用しようとする発想は、写真がまだ珍しかった時代において、御真影に接した経験が、肖像写真を扱う際の考え方を供したことを示す点で興味深いものです。

小貫の提案は、函館の書記官を通じて東京の書記官に伝わります。折しも天覧用の撮影が進んでおり、記録課（東京）は、記念のために撮りおくのはよいが、天皇を祝う三大節（四方拝・紀元節・天長節）に天皇の写真と同様に揭示するのは甚だ不体裁で望ましくなく、なおかつ、公然官費使用は望ましくないとの方向を示します⁸（三月一六日付）。

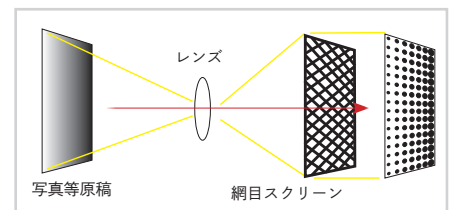
検討の結果、開拓使の高官は自己負担で写真を用意するものの揭示はしないという結末を迎えたようです。その結果が、北海道に残った官員写真帖であると想われます。



開拓使本庁舎
『温故写真帖 第1集（札幌）』
東北帝国大学農科大学 編 維新堂 明42.9
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763031/7>



18「肖像画報」(百六十五) 愛知県知事 沖守固 (鈴木真一の撮影に基づく徳永柳洲の画) 『萬朝報』第1900号 明治32年1月22日付
 写真を組み込む技術が本格化する前には、写真を絵でいったん描き、新聞本紙に印刷する手法もしばしば見られた。
 <佐々友房関係文書 1008 >



網目スクリーンを用いて
 写真を網点に変換する仕組み

19『毎日新聞』6307号附録(貴ノ廿五、衆ノ廿七) 明治24(1891)年12月3日
 <憲政資料室収集文書 1342 >

印刷のインパクト
 今日、名士の中でも、特に、政府高官や政治家の顔は各種報道、ポスター、選挙入報本人のサイト、SNS等を通じて溢れ出しています。その事はじめは、錦絵や雑誌など明治期にさかのぼりますが、新聞紙上の写真印刷の画期とされるのが、帝国議会開設前後の『毎日新聞』の附録です。
 画像19がその附録の一例です。写真の
 ように濃淡のある画像を表現するには、
 網目スクリーンを用いて網点に変換しま
 す。この技術を実用化させ、明治二三
 (二八九〇)年、新聞紙一頁大の附録と
 して開会間近の第一回帝国議会の議員の
 顔写真が『毎日新聞』に突如掲載された
 ことは、新聞界の「大変革」であるとし
 て世間を騒然とさせました。附録の形で
 はなく、新聞本紙への写真印刷が実現す
 るのは、明治三七(一九〇四)年からの
 ことで、写真製版された網目銅版を輪転
 機に組み込む技術の実用化を待つ必要が
 ありました。⁽¹⁰⁾

パスポートと肖像写真

証明に使うということも、肖像写真の今なお重要な機能です。パスポートはその最たるものかもしれません。

牧野伸顕のパスポート

大正 8 (1919) 年
 牧野はパリ講和会議の全権
 委員。印刷された写真を貼っ
 ている。<牧野伸顕関係文書
 C152>



野村吉三郎のパスポート 昭和 28 (1953) 年、米国訪
 問時。<野村吉三郎関係文書 1032>

- 1 他に平成 16 (2004) 年当時において、一部の肖像を同サイトに採録した写真帖として矢部信太郎編『近代名士之面影 第 1 集』竹帛社、1914 <419-34>
- 2 蒐集家としての中川忠三郎と宮武外骨との写真を通じた交流について、緒川直人「宮武外骨と昭和戦前期の古写真アーカイブ 明治新聞雑誌文庫と『公私月報』を中心に」『東洋大学社会学部紀要』2013.3 <Z6-517> p.48
- 3 写真授受については本連載の前回号「西園寺公望と写真」本誌 697、2019.5、pp.5-14) を参照。
- 4 武部敏夫、中村一紀 編『明治の日本 宮内庁書陵部所蔵写真』吉川弘文館、2000 <GB415-G42>; 白石 烈「明治・大正両時代御手許写真の来歴」『書陵部紀要』宮内庁書陵部 編 (67):2015 年度 <Z22-358> pp.53-73; 白石 烈「宮内省図書寮における明治・大正両時代御手許写真の整理 (附目録)」同誌 (69):2017 年度 <Z22-358> pp.57-79,119-123
- 5 『明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」= Portrait photograph albums: by the imperial order of Meiji Emperor, 1879 : 四五〇〇余名の肖像』宮内庁三の丸尚蔵館 編, 宮内庁, 2013 <GK13-L37>; 宮内庁三の丸尚蔵館 編『明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」収藏品目録写真』上・下, 宮内庁, 2015 <GK13-L403> <GK13-L404>
- 6 1 冊目(官員写真帖一)は、38 枚の肖像写真、2 冊目(官員写真帖二)は、それと重複する 30 枚の写真からなる。(北海道大学附属図書館所蔵)
- 7 「開拓使公文録 函館支庁往復 明治十三年」簿書 5911-120 (北海道立文書館所蔵)
- 8 同上
- 9 この製版を行ったのは堀健吉(安政 3 (1856) ~ 昭和 9 (1934)) である。堀はキヨソネの門弟、江島鴻山に銅板印刷を学び、陸軍陸地測量部に勤務し、印刷所として著名な秀英舎(大日本印刷会社の前身)・佐久間貞一氏の後援を受けて、スクリーンの研究に励んだ。
- 10 当該期の写真をめぐる印刷についても分かりやすく言及した文献の一例として井上祐子『日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち』(歴史文化ライブラリー; 348)、吉川弘文館、2012.7 <UC89-J12>

本稿に登場した名士たち

- ・桂太郎 (1848 ~ 1913) 陸軍軍人、首相
- ・新渡戸稲造 (1862 ~ 1933) 教育者、学者
- ・大山巖 (1842 ~ 1916) 陸軍軍人、政治家
- ・徳川家達 (1863 ~ 1940) 徳川宗家第 16 代当主、貴族院議長
- ・石黒五十二 (1855 ~ 1922) 官僚、土木技術者、政治家
- ・田辺太一 (1831 ~ 1915) 幕末 - 明治時代の武士、外交官
- ・安藤太郎 (1846 ~ 1924) 外交官、禁酒運動家
- ・大鳥圭介 (1833 ~ 1911) 幕臣、政治家、外交官
- ・近衛篤磨 (1863 ~ 1904) 政治家、貴族院議長
- ・品川弥一 (1870 ~ 1924) 実業家
- ・阪谷朗廬 (1822 ~ 1881) 学者、官僚
- ・西周 (1829 ~ 1897) 啓蒙思想家
- ・龍野周一郎 (1864 ~ 1928) 政治家、衆議院議員
- ・日高真實 (1864 ~ 1894) 学者
- ・澤柳政太郎 (1865 ~ 1927) 官僚、教育者
- ・木内重四郎 (1866 ~ 1925) 官僚、政治家
- ・土方歳三 (1835? ~ 1869) 新選組副長
- ・松岡磐吉 (1841 ~ 1871) 幕臣、旧幕府軍艦蟠竜丸艦長
- ・沖守固 (1841 ~ 1912) 官僚
- ・野村吉三郎 (1877 ~ 1964) 海軍軍人、駐米大使
- ・牧野伸顕 (1861 ~ 1949) 外交官、内大臣

記憶される肖像写真

個人のやりとりのため、証明のため、観光の記念のため、慰霊のため、など肖像写真の用途はさまざまです。写真の複製がきわめて容易になった今日、名士の肖像写真は、転載や記憶の中で活発に循環を繰り返しているようです。

調査及び立法考査局（以下、調査局）では、国政課題に関し、国会議員からの依頼に応じて調査を行うとともに、国会審議に役立つ資料や情報の提供を行っています。

政治制度や金融政策、教育問題など専門分野は様々ですが、調査局の職員は、日頃から勉強会や外部のセミナーに参加するなどして、専門知識の向上に努めています。私の所属する調査企画課企画係では、その一助となるよう、職員が館内で受講できる一連の研修を企画しています。それが、「調査業務研修」です。

この研修は、毎年、国会が閉会していること多い7月から9月にかけて行われますが、その準備は4月から始まります。まずは、前年度の受講生からの声などを参考にしつつ、企画案を作成します。例年20科目ほどを開講していますが、各国の議会情報や法令の調べ方、データベースの使い方から最近の国際情勢まで、内容は多岐にわたります。講師の顔ぶれも多彩で、調査局のベテラン職員が務めることもあれば、大学教授をお招きすることもあります。初めて開催する科目の場合、受講生の求めるレベルやテーマを勘案しながら、講師候補者の著書などを読み込み、どなたに講師

をお願いすべきか何度も話し合います。

企画案は、調査局にある15課の委員で構成する研修企画委員会で検討されます。企画案が了承されると準備を本格化させますが、講師の日程が合わなかったり、会場を押さえられなかったりとパズルを解くようにスケジュールを組み立てる大変さは、企画係に異動して初めて知ったことです。

研修当日は、資料の準備や会場設営に忙しく、研修中も、パソコンの動作に問題はないか、部屋は暑すぎないか等、気が抜けません。多彩な講師の講義と一緒に聴ける喜びはありますが、集中して聴いているわけにもいかず、質問タイムではマイクを持って受講生の間を走り回るようになります。

研修後のアンケートでは、「外国制度の調査依頼が多いため、研修で学んだ外国の議会資料や法令の調査方法が非常に役に立つ」、「表計算ソフトやビジュアル・デザインの研修を受けて、分かりやすい資料作成ができるようになった」などうれしい感想も聞かれます。一方、簡単すぎ、難しすぎ、聴きたい内容と違ったなど厳しい意見もあり、企画係は、こうした声を次年度の研修に反映させるよう努めています。

（調査企画課企画係 永田 恵）



調査及び立法考査局
職員のための
夏期集中講義！

出島

の

クリスマス

亀澤 明彦



『諸御役場絵図』 [写]
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9369216/62>

そろそろ街がクリスマスシーズンの賑わいをみせる。街路はきらびやかな電飾の光で照らされ、ところせましと赤と緑のカラージュがひしめきあう。陽気な定番ソングが多彩な顔をみせ、一段と寒くなった冬の街並みに火照った高揚感が浮遊する。首をながくしてプレゼントを待つ子ども、サンタクロースの仕事を代行する親、デートのプランを練る恋人たち——訪れるクリスマスに人々は踊らされる。

いまでもなく、クリスマスは日本社会の一大イベントとなっている。しかし、イエス・キリストの誕生を祝福するこの祭日は、もともとはキリスト教文化圏の外にあった東洋の伝統にはなかったものである。今日のように年末を彩るに欠かせない行事となる道程には、キリスト教に対する厳しい弾圧によって、各個人がその儀式を執り行なうことさえ重罪とされていた時代もあった。

江戸時代の出島には、そうしたキリスト教の禁制にもかかわらず、密かにクリスマスの祝祭が存在したという。今日とはまったく対照的な状況にあつて、出島のクリスマスはどのようなものであったのだろうか。資料をたどりつつ、その素描を試みたい。

1. 出島の姿

江戸時代の寛永13(1636)年、出島は人工の島として長崎に築造された。四方を海に囲まれ、扇の形をした土地は約1万3117平方メートル、長崎市内とは1つの石橋のみでつながっていた。

出島に居住することになったのは、貿易のために日本に滞在していた西洋人であった。幕府は西洋の宗教、キリスト教の禁制を徹底することを目的として、そうした窮屈な環境に西洋人を隔離したのである。築造された当初はポルトガル人が隔離されたが、直後の寛永16(1639)年には日本からポルトガル人が追放され、それ以降はオランダ人が居留することになった。鎖国下の日本において、出島はオランダ東インド会社のオランダ商館を中心として、欧米とつながる唯一の貿易地としての役割を担うことになる。

出島のオランダ人は、キリスト教の禁制のために、その行動が厳しく管理されることとなった。島外との自由な行き来が認められなかったほか、キリ

スト教装飾品の売却や交換、聖書や聖歌集の公開、キリスト教儀式の執行が厳罰をもって禁じられていたことが『長崎オランダ商館の日記』に記されている。さらに極端な事例としては、幕府の役人が解読できない洋書をオランダ船から出島に持ち込むことすら許されなかったこともあったという。

こうした相対する二つの側面が出島にはあった。つまり、出島は洋上に弧を描いて異国にひらかれた「扉」であった一方で、内実は——当時のオランダ人がそう呼んだように——「牢獄」でもあった。安政2年12月(1856年1月)の日蘭和親条約によってオランダ人の自由な出入りが認可されるまでのおよそ二百年間、この孤絶の「牢獄」は存続する。

2. 阿蘭陀冬至

キリスト教の儀式であるクリスマスの祝祭を執り行なうことは、もちろん出島では重刑に処せられるはずであつただろう。しかし、幕府の鋭敏な目をかいくぐるオランダ人の巧妙な手によって、出島の冬にもクリスマスのキャ



『長崎図』 富島屋 寛政8 (1796) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539890/2>

ンドルは灯されていた。

オランダ人の秘策——それはクリスマスを冬至にかこつけて祝うことであった。出島の近くには長崎在留の中国人が居住する唐人屋敷があり、ここでは毎年、冬至に盛大な祝宴がひらかれていた。太陰暦で重要な日とされる冬至は、太陽暦では12月22日ごろにあたる。クリスマスと日にちが近い東洋の祭りを知ったオランダ人は、それをクリスマスのカモフラージュとして利用したのである。

東洋と西洋の祭りの偶然的な接近が生み出したこの擬似クリスマスは、のちに「阿蘭陀冬至」と呼ばれることとなる。江戸時代の文人である大田南畝はその著『一話一言』にて、オランダ商館にとって阿蘭陀冬至こそが最も大事な行事であることを強調している。この指摘については、キリスト教を信じるオランダ人が冬至の祝いを重視するというある種の奇妙さを滲ませ、その後には隠されたクリスマスの存在を仄めかすものだと捉える後代の解釈もある。さて、阿蘭陀冬至はどのように営まれていたのだろうか。

表向きは中国人の冬至と似たような

ものであったという。後年の資料『南蛮長崎草』は当日の様子をこう伝えている。早朝には、出島屋敷に出入りする職人や植木屋たちがオランダ船の模型を手に携え、行列をつくり、銅鑼を盛大に鳴らしながら出島をめくり歩く。夜になると、オランダ人やオランダ通詞がぞろぞろとあつまり饗宴をひらく。ここでは着飾った遊女が音楽にあわせて蝶のごとく舞い、宴会には優雅な雰囲気漂っていた。

阿蘭陀冬至の宴会は、石崎融思の『長崎古今集覧名勝図絵』収載の「蘭人会食之図」に描かれている(次ページ図参照)。これから食事がはじまるころだろうか。盛装に身を包んだオランダ人と着物姿の遊女が、テーブルクロスが敷かれた大きな食卓を囲み、開宴の挨拶を交わしている。晚餐の食卓にはキャンドルやカトラリー、そして豚の頭がおかれている。

この豚の頭こそが、阿蘭陀冬至の宴がクリスマスの祝祭であることをこっそり伝えている。北欧神話由来の伝統には、果物をくわえさせた猪の頭を食



出島のオランダ商館

『西国写生』 [長谷川雪旦画] [18-][写] <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287971/14>



出島に蘭館、内陸に唐館が描かれている。

『長崎版画集 続々(長崎八景)』
夏汀堂 昭和4<請求記号 422-116>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688611/13>
(図書館送信サービス参加館でご覧いただけます)

卓の中央に据えるというクリスマスの風習がある。12世紀には絶滅しつつあった猪の代わりに豚が用いられることもあったというが、中世にヨーロッパ各地へ広まったとされている。「蘭人会食之図」の豚の頭も果物らしき丸いものをくわえており、同じくクリスマスに因んだ料理であったことは間違いないだろう。

出島のクリスマスは、このように東洋と西洋の文化が折りあわさったユニークな行事であった。ただし、この折り合いはうち解けた融和の産物などではなく、その背後にはキリスト教の禁制があり、重刑の緊張が孕まれていた。いわば仮装のブリコラージュともいべき阿蘭陀冬至の構成は、オランダ人の巧みな着想だけでなく、出島という環境に備わる二面性、異文化とのアンビヴァレントな関係性にもそのゆえんを求めることができるのだろう。

3. 阿蘭陀冬至の物語

戦前の大衆文芸の振興を担った作家、平山蘆江の『長崎出島』には阿蘭陀冬

至が取りあげられている。先祖代々長崎に住んでいた蘆江が長崎人の人情を投影したというこの小説は、江戸時代後期、フェートン号事件で揺らぐ出島を舞台にした恋愛物語である。実在の人物でもあるオランダ商館長「ツーフ」（ヘンドリック・ドゥーフ、1803年から1817年まで商館長を務めた）、オランダ人と遊女のあいだに生まれた「お花」、生来長崎で暮らす青年「末永」、丸山遊女の「およう」といった登場人物が色鮮やかな群像劇を織りなしている。

『長崎出島』の阿蘭陀冬至の場面では、登場人物の何気ない会話のなかに——明治生まれの蘆江による想像であろうが——阿蘭陀冬至における出島の空気が見事に表現されている。たとえば、次のような場面にかがえよう。

「お花ちいもおようさんも、かびたん(商館長) 甲比丹にお祝ひばいひまつせ。これはマリヤさまのお祝いのけん、そのつもりでね」

末永は声をひそめて云った。
「うちは知つとる、クリスマスといふとでせう」

お花はちやんと知つてゐて、うつか



「蘭人会食之図」
『長崎文献叢書 第2集 第1巻 長崎古今集覧名勝図絵』
長崎文献社 1975 <請求記号 GC274-18>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9769684/106>
(図書館送信サービス参加館でご覧いただけます)



オランダ商館を描いたこの絵にも豚の頭らしきものが描かれている。

『長崎土産』
磯野信春 著・画 大和屋由平寿櫻 弘化4 (1847)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536303/17>



り大きな声を出した。

「これ、そんげん声ば出すと、磔刑になるばい」

女たちは一寸顔色をかへて、目を見張った。

クリスマスに浮かれるお花とおようは、その愉しみが死罪に値するという事実に当惑し、言葉を失ってしまふ。二人の女性の繊細な心情の変化のなかに、阿蘭陀冬至の緊張感がうまく醸しだされている。

また阿蘭陀冬至のもう一面、異文化が混ざりあうさまは、おようの無邪気さにみえる可笑しみとともに、こう表現されている。

不図^{ふと}テレくさい目を上へあげると、窓のかまちに椽の木の小枝がふらさがつて居り、枝には足袋が二足結び下げたあつた。

「あんげんところに足袋のぶらさげてある」

おようが云つて伸び上つた。

「あれはおらんだ冬至のおかざりげな、いつの年の冬至でも、甲比丹がああ

ふ風に置いて置きなはつと。いつもは、

靴下ばぶらさげるとばつてん、去年から靴下もなかけん日本の足袋にしなはつたとです。二つあるけん一つづつ分けまつしよや、何か入れてあるぢやろ」

もちろん後世による小説である以上、こうした場面が実際にあったかは定かではない。しかし、『長崎出島』において蘆江が試みた阿蘭陀冬至の再現は、フィクションの域を超えて、人情味あふれる豊かなリアリティの獲得に成功している。「おぼろげながら見当づけられる」と蘆江がいうように、江戸時代にクリスマスを生みだした出島、その痕跡が長崎に残っているからなのかもしれない。



これまで紹介してきた資料の多くは国立国会図書館デジタルコレクションで公開されています。また江戸時代のオランダ事情については、国立国会図書館の電子展示会「江戸時代の日蘭交流」においても様々な関連資料が公開されています。ぜひご覧ください。

参考文献

大田南畝「一話一言補遺」『蜀山人全集 巻5』吉川弘文館 1908
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993340>

永積洋子「出島」『世界大百科事典』平凡社 2014

オランダ東インド会社長崎商館 編、村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記 第1輯』岩波書店 1956 <請求記号 210.5-0764n-M>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2992598> (※)

松浦直治『長崎の歴史 開港四百年』長崎開港四百年記念実行委員会／長崎文献社(発売) 1970年 <請求記号GC274-3> <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9769206> (※)

永見徳太郎『南蛮長崎草』春陽堂 1926 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1870315>
(※図書館送信サービス参加館でご覧いただけます)



平山蘆江『長崎出島』婦人之家社 昭和18 (表紙・裏表紙)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1133531> (モノクロ画像)

電子展示会「江戸時代の日蘭交流」が
国立国会図書館ウェブサイトでご覧いただけます。

国立国会図書館は江戸幕府旧蔵の蘭書（オランダ語の書籍）をはじめ、蘭学関係の資料も多数所蔵しています。2009年に日蘭交流400年を記念し公開した電子展示会「江戸時代の日蘭交流」では、さまざまな資料を元に、日蘭交流の歴史をご覧いただけます。

<https://www.ndl.go.jp/nichiran/index.html>



本屋に

ない

本



五線譜に描いた夢 150 years of modern Japanese music 日本近代音楽の150年

樋口隆一、林淑姫、岡部真一郎、天沢退二郎、
倉田喜弘、塚原康子、森本美恵子、末永理恵子
編著

明治学院大学 2013.10 255p 27cm
<請求記号 KD191-L8>

幕末期以降、いわゆる「クラシック音楽」を中心とした西洋の音楽は、日本でも本格的に受容され、独自の発展を遂げてきた。本書は、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館の所蔵資料を中心に、豊富な資料でその歴史を辿るとともに、音楽を通して近代日本の歩みを描くことをも企図した、意欲的で前例のない展覧会（2013年東京オペラシティアートギャラリーにて開催）の図録である。

本書のメインとなる資料図版部分は、四章に分かれる。へー幕末から明治へは、黒船の楽隊や讚美歌との接触に始まり、《君が代》、軍楽隊の組織、鹿鳴館での音楽会などで日本が近代国家の体裁を整え、唱歌教育を通して西洋音楽が一般に普及してゆく過程を追う。続くへー大正モダニズムと音楽では、西洋音楽は教育から芸術、或いは娯楽の領域へと広がりを見せる。留学帰りの山田耕筰が精力的に活動し、童謡や音楽批評が生まれる一方、竹久夢二らが表紙を描いたセノオ楽譜が飛ぶように売れ、浅草オペラにファンは熱狂した。へー昭和の戦争と音楽では、いよいよ日本人による器楽、オーケストラ曲の作曲が本格化し、音楽はラジオやレコードなどの媒体と繋がりを深める。しかし、やがて戦争が音楽家を厳しい統制の下に置き、音楽は「軍需品」に変わる。終章へー「戦後」から21世紀へでようやく戦火が止むと、武満徹ら若い音楽家たちは新たな道を

模索し始め、その動きは大坂万博で一つの集大成を迎える。そして今日、多くの日本人音楽家が海外で活躍し、日本は西洋音楽の拠点の一つとなった。本書はこうした歴史を出版譜、楽器、レコード、書簡、写真、絵画など多彩な資料の図版を巧みに配置して辿るが、中でも貴重なのは、様々な作曲家の手稿譜の図版だ。そこに残された筆致は、時に作曲家の個性や、創作過程での試行錯誤を如実に反映し、見る者にまるで音楽そのものを聴くかのような生々しい印象を与える。

また、色とりどりの演奏会のポスターやプログラムも目を引く。こうした資料は「エフェメラ」と呼ばれ、流通の範囲に限られる上に、一枚物など簡素な形態のものが多いため、なかなか後世に残らない。日本近代音楽館を始め、それらを丹念に収集・整理・保存してきた先人の多大な努力が偲ばれる。

図版のほか、各所に挿入された解説やエッセイも、読者の近代日本音楽史への理解を促してくれる。さらに、巻末の詳細な「年表」、主要誌の刊行時期を示した「日本の音楽雑誌1890・2013」、分野別の「文献リスト」は調べ物などにも有用だ。一般の人々のもとより、研究者や演奏家などの専門家をも含め、音楽や近代の日本に興味ある人すべてにとって魅力的な一冊である。

（工藤哲朗）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

令和元年度東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム

「震災伝承施設と震災アーカイブ」

国立国会図書館は、東北大学災害科学国際研究所との共催により、東日本大震災アーカイブ国際シンポジウムを開催します。本シンポジウムでは、ハワイの太平洋津波博物館館長のマリーリン・スー・ムリー氏を特別講演者に招き、震災伝承施設の海外の事例として、同館の取組を紹介いたします。次に、国内各地の震災アーカイブや震災伝承施設について現状報告を行い、最後に、震災伝承施設と震災アーカイブがどのように関係していくことで、互いの利活用の向上につながるかについて議論します。

○日時

令和2年1月11日(土) 13時～16時30分

○会場

東北大学災害科学国際研究所多目的ホール

(仙台市青葉区荒巻字青葉468-1)

仙台市営地下鉄青葉山駅下車 南出口徒歩5分)

○プログラムと登壇者

【特別講演】

マリーリン・スー・ムリー氏(ハワイ太平洋津波博物館館長)

【報告①】

起田淳氏(厚真町地域防災マネージャー)

長瀧夢子氏(厚真町まちづくり推進企画調整グループ主任)

山尾敏孝氏(熊本大学名誉教授)

中川透(国立国会図書館電子情報部主任司書)

【報告②】

白澤渉氏(釜石市総務企画部総合政策課震災検証室長)

柴山明寛氏(東北大学災害科学国際研究所准教授)

【パネルディスカッション】

報告者全員

○申込方法

「みちのく震録伝」(<http://shinrokuden.irdes.tohoku.ac.jp/>)掲載のシンポジウム案内からリンクしている「参加申込みフォーム」にてお申し込みください。定員(200名)に達した時点で受付を終了します。

○問合せ先

東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門
災害アーカイブ研究分野

電話 022(752)2099

電子メール archiveforum@irdes.tohoku.ac.jp

※シンポジウムの詳細については、「みちのく震録伝」ホームページをご覧ください。

新刊案内

平成30年度国際政策セミナー報告書

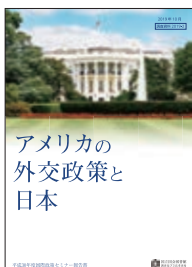
「アメリカの外交政策と日本」

戦略は変容したのか？トランプ政権と「インド太平洋」

におけるアメリカの外交政策

二元的大統領制とトランプ外交

トランプ外交…内政からの視点



A4 69頁 不定期刊
ISBN 978-4-87582-843-3
以下のURLからPDFファイル
をご覧ください。
http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11362827_po_201902.pdf?contentNo=1

レファレンス 825号

政策効果の定量的把握

英国のレファレンダム法制―憲法改革と国民投票制度の諸相―

相

カナダにおけるメンタルヘルス問題―連邦議会及び政府の取組―

都市鉄道の混雑問題―東京圏における現状と対策―

就職氷河期世代への支援の現状と課題



A4 126頁 月刊 1,000円(税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

おもな人事

〈異動〉※()内は前職

令和元年10月1日付け

主幹 調査及び立法考査局文教科科学技術調査室付

(主幹 調査及び立法考査局総合調査室付)

相原 信也

主幹 調査及び立法考査局総合調査室付(総務部副部長)

藤本 和彦

第11回科学技術情報整備審議会

9月26日、東京本館において、第11回科学技術情報整備審議会が開催され、審議会委員・専門委員10名のほか、館長、副館長、幹事等職員16名が出席しました。当館から第四期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画の進捗状況のほか、ジャパンサーチ、次世代デジタルライブラリーの状況について報告しました。その後の質疑では、デジタル化資料の活用、オンライン資料の収集の必要性、メタデータ整備の重要性、ジャパンサーチの連携対象等について、委員から意見が述べられました。

また、第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画の策定に向けて、基本方針検討部会を設置することが、審議の上、決定されました。西尾委員長から竹内委員長代理が部会長に、佐藤委員、生員専門委員及び北本専門委員が部会員に指名されました。

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和元年9月26日現在)

委員長

西尾 章治郎 大阪大学総長

委員長代理

竹内 比呂也 千葉大学副学長

委員

石田 徹 日本商工会議所専務理事

喜連川 優 情報・システム研究機構国立情報学研究所
長/東京大学生産技術研究所教授

ロバートキャンベル

人間文化研究機構国文学研究資料館長

児玉 敏雄 日本原子力研究開発機構理事

佐藤 義則	東北学院大学文学部教授
戸山 芳昭	国際医学情報センター理事
濱口 道成	科学技術振興機構理事
藤垣 裕子	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授
増子 宏	文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)
村山 泰啓	情報通信研究機構戦略的プログラムオフィサー研究統括
専門委員	
生員 直人	東洋大学経済学部准教授
北本 朝展	国立情報学研究所准教授



審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ>事業紹介>科学技術情報整備>科学技術情報整備審議会 (<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/tech/council/index.html>)に掲載しています。

訂正

本誌で次の誤りがありました。
699/700(2019年7/8月)号「国立国会図書館月報」700号の「あゆみ」
19ページ「誌面の変化」におけるはじめてのカラーページについて
(誤) 国際子ども図書館の開館を報告する記事でした。(平成12(2000)年6月号)
(正) 写真で国立国会図書館の50年を振り返る記事でした。(平成10(1998)年7月号)
お詫びして訂正いたします。



15 関西館 閲覧室入口 photo by Mizuho

国立国会図書館月報

年間索引

一般記事

数字で見る国立国会図書館：『国立国会図書館年報 平成29年度』から	1	21-24
第84回FLA年次大会	2	4-11
第12回APLAP大会	2	18-21
デジタルライブラリーカフェ「今年も」開店中	2	24-25
開館70周年記念展示講演会	3	4-12
一冊の中には小宇宙：江戸時代のスクラップブックを開く（ロバート キャンベル）	3	4-7
本でまなぶこと 街が教えてくれること（井上 章一）	3	8-12
クラブさんの思い出：レベッカ・ロウさんインタビュー	3	18-19
憲政資料のデジタル化：伊藤博文関係文書・勝海舟関係文書のデジタル画像を公開しました	4	4-17
「伊藤博文関係文書」のデジタル化に寄せて：『伊藤博文秘録』講読のころ（瀧井 一博）	4	5-9
伊藤博文関係文書の世界	4	10-15
勝海舟の旧蔵資料紹介：新規公開のデジタル画像から	4	16-17
子どもと本をつなぐ大人のために：国際子ども図書館児童文学連続講座	4	24-29
乱歩と活動写真：リサーチの場としての帝国図書館（藤元 直樹）	6	18-21
ミニ電子展示「本の万華鏡」第26回 恋の技法：恋文の世界	6	23-28
第54回貴重書等指定委員会報告：新たな貴重書のご紹介	7/8	5-13
『国立国会図書館月報』700号のあゆみ	7/8	14-24
講演会「私が子ども時代に出会った本」：角野栄子	9/10	5-10
ある人が国立国会図書館のインターネットサービスで調べてみた①	9/10	16-19
憲政資料室の新規公開資料から	11	6-13
展示会「絵本に見るアートの100年—ダダからニュー・ペインティングまで」	11	15-20
出島のクリスマス（亀澤 明彦）	12	17-21



凡例

憲政資料室の新規公開資料から	11	6-13
記事タイトル	掲載号(月)	掲載ページ数

今月の一冊

『エッフェル塔三十六景』より：日本美術に魅せられた芸術家たち	(本間 渚沙)	1	3-7
「享保名物帳」：伝えられてきた“名物”刀剣	(町屋 大地)	2	1-3
優美な黒蝶、謎のサソリ：『昆虫圖譜』から	(小針 泰介)	3	1-3
Alice's adventures in Wonderland：アリスという愛らしい少女像のはじまり	(藤崎 理恵子)	4	1-3
『甘藷百珍』：江戸時代のサツマイモ料理	(永村 恭代)	5	1-4
アンリ・コルディエ『中国書誌』：欧米における中国研究500年のパノラマ	(鴫田 潤)	6	1-4
本の疎開：8月15日を越えて	(齋藤 ひさ子)	7/8	1-4
Quiz：なるほど！ザ・ジャパン	(西川 久司)	9/10	1-4
商業に於てハ決して政府の威権を假(か)るべきものにあらず	(大森 健吾)	11	1-5
『奈留美加多』：古(いにしえ)のデザインに学ぶ	(藤田 千紘)	12	1-5

本の森を歩く

(第18回) 物語と法	(井田 敦彦)	1	8-12
(第19回) 机の上の戦争：近代日本の「ウォーゲーム」	(宇野 亮一)	2	12-17
(第20回) 地図から消えた庭：小沢文庫から	(里見 航)	3	20-27
(第21回) 鉄のカーテンの隙間から：戦後のソ連関係資料あれこれ	(富田 穰治)	11	22-31

資料の世界の歩き方
写真を読む

(第1回) 西園寺公望と写真	(葦名 ふみ)	5	5-14
(第2回) 名士の顔をめぐって：印刷前夜の肖像写真	(葦名 ふみ)	12	6-15

世界図書館紀行

ミュンヘン国際児童図書館	(中野 怜奈)	1	13-18
東海岸三都物語 (ボストン・ニューヨーク・ワシントンD.C.)	(浅井 一男・松田 恵里・藤田 壮介)	6	5-17
タンザニアの図書館	(宇野 亮一)	9/10	21-27

日本図書館紀行

宮城県図書館	(郷田 亜弥)	9/10	11-15
--------	---------	------	-------





国立国会図書館にない本

戦前の全集月報附録類	(鈴木 宏宗)	5	15-23
------------	---------	---	-------

あの人の蔵書

(第1回) クラップ・コレクション	(小林 昌樹)	3	13-17
-------------------	---------	---	-------

What's 書誌調整 ふたたび

(最終回) 日本から世界へ：データの相互運用性		4	19-23
-------------------------	--	---	-------

本屋にない本

コミックマーケット40周年史：40th Comic Market chronicle	(八尾 典明)	1	20
石田英吉年譜：勤王の志士から明治政府の官僚へ	(眞子 ゆかり)	2	23
ガチャガチャ大研究：パカッとあけたら「あら、不思議！」	(小竹 毅郎)	3	29
宝塚歌劇100年展：夢、かがやきつづけて	(青木 ふみ)	4	30
世界の軌跡を未来の英知に：Finding wisdom for the future in the tracks of the past	(吉井 伶奈)	5	25
京のかたな：Swords of Kyoto 匠のわざと雅のこころ 特別展	(高橋 玲奈)	6	29
アルド・マヌーツィオとルネサンス文芸復興	(御幡 真人)	7/8	26
盲導犬と歩く：Walking with guide dogs	(倉谷 麻耶)	9/10	28
The history of Nifty：our network culture ニフティ30年史記念冊子	(千歳 誠之)	11	21
五線譜に描いた夢：150 years of modern Japanese music 日本近代音楽の150年	(工藤 哲朗)	12	22

館内スコープ

「本屋にない本」に囲まれて		1	19
ホームページの「顔」		2	22
たくさんの声を聞きながら		3	28
ルール作りの現場から		4	18
「児童書研究資料室」はこわくない		5	24
システムから来館利用サービスを支えます		6	22
あなたのもとにお届けします		7/8	25
施設のことなら、なんなりと		9/10	20
何も起きないことが一番です		11	14
調査及び立法考査局職員のための夏期集中講義！		12	16



バックナンバーは
PDFでもよめます



<https://www.ndl.go.jp/jp/publication/geppo/>

冊子版のご購入については、公益社団法人日本図書館協会へお問い合わせください。バックナンバーも取り扱っています。
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812(販売)

12

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.12

NO.704
DECEMBER
2019

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Narumikata—The beauty of ancient design
- 06 Browsing library materials—deciphering photographs (2)
Faces of the Famous—Portraiture of celebrities prior to halftone printing
- 17 Christmas in Deshima
- 16 <Tidbits of information on NDL>
Summer course for researchers of the Research and Legislative Reference Bureau
- 22 <Books not commercially available>
Gosen fu ni egaita yume: 150 Years Of Modern Japanese Music
- 23 <NDL Topics>
- 25 Annual index to the National Diet Library Monthly Bulletin, Nos. 693–704

国立国会図書館月報

令和元年12月号 (No.704)

令和元年12月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 三浦良文
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.12

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士